

京都と本願寺（2・9・8）

藤音 晃祐（昭17・文丙）

只今御紹介をいただきました、藤音晃祐と申します。三高同窓会の御命令でありまして何か話をせよ、ということなんですが、最初に申し上げておかなくてはならないと思うのですが、私、只今浄土真宗本願寺派総長という仕事をしておるわけですが、本来は九州大分県の方の寺の住職です。で、これはまあ誤解をされると困るんですが、総長というのは別に学や徳があるからというわけではございませんので、宗派の事務職員のヘッドであるということでありまして、まあ事務員でありまして、その辺をひとつ間違えのないようにして下さい。まさか藤音の話聞いて救われようなんて思ってたっしやる方は居られないと信じておりますけれども、そういう事はさらさら無いんで、大体まかり出ましたのは罪ほろぼしと言いますか、感謝と言いますか、同窓会に対しては不義理ばかり重ねておりますのでそのお詫びの為であります。

私は実はあまりいい同窓会員ではないと思っております。自分の事を申し上げなきゃならん

ですが、私共は昭和十七年の三月三高卒であります。十七年には実は二回卒業生がありますので、十七年の三月卒とそれから九月卒、つまり戦争のために高等学校の学年短縮がありまして、私共は高等学校三年間、その次の年は二年半でありました。

高等学校は三年やらしていたんですが大学は短縮で二年半、一回生が半年で二回生が一年だったんですが、ところがその二年半も三回生になった途端に世にいわゆる学徒出陣なんですから、徴兵検査を受けさせられて十八年の十二月に大体みんな入営いたしました。ま、そういう学生であります。その時に三回生だったもんですから仮卒業という制度がありました。戦争が終わって復員して、大学に行きましたら、もう君は卒業しておると言う。ですから履歴書では十九年九月京都大学卒業ということになっております。

十九年九月といいますがと兵隊さんの真最中でありまして実に変な、まあ卒業論文を書かずに卒業したという偽せ学士のようなもんであります。それではどうしましょうと言いますと、大学に来るつもりが有るんなら大学院へ入れてやるといふ様なことで、即、大学院に入りました。あんまり勉強はしていませんけれども、もともと私は大学は京都大学の宗教学専攻という、今は京都大学の宗教学は宗教学とそれからキリスト教神学とに別れているんですが、その頃はまだ別れていなかった。西谷啓治先生の不肖の弟子なんでありますが、同学年は私と他に一人です。私の一年上はゼロ、その上は一人でしたかな。そういう時代の、有難い良き学生生活を送らせてい

ただいたと思っております。

それはそれと致しまして、三高では昭和十六年度の生徒総代でございました。昭和十六年度といたしますと大東亜戦争が始まった年です。あの頃は生徒総代が応援団長を兼ねるということになっておりました。今日は大先輩の方々も居られますが、私から何年前か、もう亡くなった早川さんが団長をしておった時ですが、一高戦で大乱闘事件が有りまして、そんな事で応援団の改組と言いますか、そういう事が問題になりまして、全校応援団ということで生徒総代が団長を兼任すべしということなんです。そういうことで一高戦の応援団長を務めたんですが、ただこれは一種の幻の応援団長でありました。

昭和十六年の夏に独ソ開戦がありました。十二月には大東亜戦争が始まるわけですが、今でも覚えておりますが全校応援団ですから試合の時だけ応援するのではダメでありまして、練習を応援しなくてはならないと。諸先輩ご記憶があると思いますけれども、毎日練習をやっていると、まあ毎日出るのは応援団の係員くらいのもんですけれど、行くんですが、週に一回は瀬田までボートの応援に行かなければならないんですね。石山の駅でしたか、あの辺を歩いている時だったと思うんですが独ソ開戦、ドイツがソ連に攻め込んだんですね。で、号外が出ておりました。「こりやえらい事になったなあ、ひよっとしたら今年の一高戦はどうなるか判らんなあ。」と言いながら街を歩いた記憶が有りますが、その果たせるかな、夏休みがまだ始まらないという

時に文部省の命令で対校戦全部中止ということになりました。結局対校戦をやらない応援団長ということになったんです。

それではあまりに残念でありますので、秋十一月頃に一高の応援団長と相談しまして、ラグビーとホッケーとだけ、対部戦なんですけれどもやりました。ホッケーは京都でやってラグビーは東京でした。私は東京へ行きました。どういふ訳か両方共引き分けて終わりました。そして十二月八日が来るわけです。当時は学校の色んな行事などの時には、生徒総代の檄というのが発表されるんですな。で、十二月八日に、あれは理科教室ですか、悪筆をふるって檄を書いて貼り出しました。内容は申しわけないが細かく覚えていませんけれども、まあとにかく戦争が始まったんで一生懸命やろうと。しかし銃を取る日が来るまでは我々はやっぱり学びの庭にあって、その日の来るまではしっかり勉強しようというような事を書いた覚えがあります。戦争協力者かと言われると、戦争反対とは書かなかったことは確かであります。そういうことで、戦争責任を感じると言えばいささか大袈裟になるんですけれども戦後なかなか三高には近寄りにくかったし、同窓会にも出席しにくかったという記憶がございます。ただ文乙文丙合同で毎年京都でクラス会をやっております、それには何回か割合に良く出席したんですけれども、同窓会の大会などには、今まであまり出席しておりませんので、その罪ほろぼしもあって今日の出ないといけないかなと思つたようなことでございます。

それともう一つは、今、本願寺の方の仕事をしておりますので広く社会に対してと言うとちょっと大袈裟ですけども、京都の市民の皆様にはいつもお世話になって居るわけでありますから、先程司会の方から申しましたが市民に対する報恩・感謝と言いますか、ご報謝のつもりで何か私に出来ることがあるならばという気持ちも若干無かったわけではないのであります。そういうことで出て来たので大変動機が複雑と申しますか浅薄と申しますか、その辺はどっちでもいいんですが、皆様の御期待に副えるような、或いは公開講演会で京都の市民の方々に聞いていただいで喜こんでいただけるような話が出来ますか、大変我ながら心もとない次第でございます。が、しかし意図するところだけは汲み取っていただいで、あわれと思つて聞いていただきたいと思ひます。

私がいわゆる学徳兼備の高僧でありましたなら御参考になるような事も申し上げられると思いますが、一番最初に申しましたようにあまり御期待なさらないようにお願いしたいと思ひます。しかしそうは申ししましてもやっぱり私は責任は感じておりますので、これは本願寺のことを申し上げるのが本筋だろうと、もっとも他に何も喋れるようなことはないんですけれども、本願寺について聞いていただくのが私としては責任をとることになるんだろうと思ひまして、「それでは本願寺の宣伝みたいな事をやらしてもらつてもいいかな？」と電話で言ったんですが、それより他に喋れることもないわけです。

ただ本願寺のことと申しましても、難しいと言うか面白いと言うかそういう話はなかなか出来ませんので、そこで歴史、歴史と言うと大袈裟になりますが、本願寺のことについていくらかでも知識を持っていただくことのお役に立つならば、と思ひまして、本願寺の歴史の中の一部分についてお話しを申し上げて責任を果たしたことにいたそうと思ひましたわけです。

そこで考えましたのが「京都と本願寺」という何の事か判らんような題目ですが、受け取り方によってはいわゆる羊頭を掲げて狗肉を売るといふやつでありまして、いかにも内容が有りそうな題ですが、実はあまり無いんです。本願寺という寺が京都にあるということは事実であります。しかしそれが本願寺にとつて或いは京都にとつてどういう意味があるのかと考へてみますと、意味が有るようでもあり、無いようでもあり、私も実は良くわからない。本願寺の側から申しますと、本願寺がずっと京都に存在したということによってどういう恩恵を受けておるかということとが考へられると思ひますが、なにしろ京都という町は一〇〇〇年の都でありまして長い間政治の中心でありましたから、そういう所に存在してきたということが何か本願寺の歴史を形成する上に意味があつたのではないかと考へてみたりも致しましたんですが。京都の方から考へてみますと本願寺が京都にあつたからといって、どこか他の所にあつたからといって、京都がどれだけ恩恵を被つただろうかと言ひますと、これも何のことも良くわからない。ここらあたりで宗教と政治の関係というようなことでやり始めますと大演説ができるんですが、そういう柄でもありま

せんので、結局関係があると言えば何か有るのかも知れないけれども無いと言ったっていいんじゃないかなと、いうような事もちよつと考えてみました。けれどもあまり気の利いた事を言うのはもう止めよう、それよりも歴史の話で本願寺という寺の歴史はこういうことでありました、ということをお話しした方が素直でよろしいと考えました。

そこで本願寺の歴史を見ますとですね、ずっと京都に居たわけではないんです。つまり本願寺という寺が京都から外に出てですね、あちこち移転しまして、そして京都に帰って来るわけですが、それが来年丁度四百年になるのであります。で、私共の方では顕如上人という、本願寺の十一代目の方なんですが、その方の四百回忌と、それから本願寺が京都へ帰って来て四百年と、それを記念して、法要をすることになっておりますが、それからずっと京都にある訳です。で、その間のことを少し聞いて頂くこうと考えました。

実は今申し上げましたように、来年が顕如上人という方の四百回忌になるわけですが、今から八、九年致しますと、平成十年に蓮如上人という方の、これは本願寺の八代目の方なのですが、その蓮如上人の五百回忌という法事を勤める年が来るのであります。この蓮如上人という方によって本願寺教団が大きくなったという意味で私共は中興チュウキョウの^{チヤウキョウ}上人と申し上げておる、非常に重要な意味を持った方なんです。その頃のことをですね、本願寺が京都から離れて転々としてそれからまた京都へ帰って来たという、その頃のことを考えてみたい。つまりずっと動かずに京都にお

た場合と、そういう風に一度京都を離れて又京都に帰って来たことと、何かそこに意味という程ではないけれども考えなければならぬものがあるのではないかと言うことを一寸考えたりしております。

それはさつきも一寸申しました様に、本願寺がどこにあるとも本願寺自体の内容に変わりはないではないかという考え方も一方ではございますが、しかしどこにあるかということに影響を受けるのではないかという気もいたしたりということなんです。これは宗教というものについての考え方と申しますか、まあ大ざっぱに申しますと純粹に個人の信仰として宗教というものを考える面と、何と申しましょうか教団という形をとって社会的な動きを示す、わかりやすく言えば団体行動の様なものと二つあると思うんですが、やっぱり私はどちらにも意味があるのではないかと、結論から言えばその様に思っておりますがそういう事を考えますと、宗教教団というものゝの形成と言う事について、たまたま私がそういう仕事柄ということもありますけれども、大いに考える必要があるのではないかという気もいたしてゐる訳でございます。

そういうことでございますので京都と本願寺という題を掲げましたが、本願寺が京都から離れていた時代に関連して本願寺の歴史をお話し申し上げようというのが今日の私の本音であります。随分、前置きが長くなりましたけれども、どうも大体、私は論文でも、何でも、序論派と云うか前置きばかりでして、内容は余り無いと、よく言われるんですけども、それは、まあ、ど

うだかわかりません。

さて、皆さん、御存知の様に私共は、浄土真宗を名乗っているのですが、浄土真宗という呼び方は、宗祖、親鸞聖人が浄土真宗とおっしゃったからなのですが、親鸞聖人が、おっしゃった浄土真宗の意味と、現在、我々が普通に用いております浄土真宗というのは、必ずしも同じではないんでして、親鸞聖人は自分が浄土真宗を開いたという様なことは、一度もおっしゃったことがないんでありまして、法然上人の教えを受けてお念仏を申すだけだと、自分が法然上人から受けた教えを浄土真宗と、こう云っているわけでありますが、今日、我々が浄土真宗といえますと、普通には、まあ一つの教団という様なものを考えます。その浄土真宗というものの、宗祖は親鸞という方であります。我々は親鸞聖人と呼んでおりますが、このことは皆さんよくご存知と思います。

日本歴史で必ず出て来る名前ではありますが、この親鸞聖人という方は、承安三年、一一七三年に生れて、弘長二年、一二六二年に亡くなっておられます。九十歳であります。それはそうなんです、この親鸞聖人という方が、本願寺という寺をこしらえたわけではない。これも皆さんご存知だと思います。親鸞聖人の生涯というものを詳しく話せば、きりがありませんが、京都にお生まれになって九つの時にお坊さんになりました。比叡山で修行されて、二十九歳の時に山を降りて、吉水の法然上人の許に行かれます。そして、お念仏を唱えて救われるという御教えに

帰入するわけでありませんが、それから五、六年経ちまして、念仏禁制の弾圧がありまして流罪になるんですね。これは法然上人も、その他の主なお弟子の人も流罪になった。その時に、親鸞聖人は越後の方に流されます。それから暫くして、許しが生まれてから、四十歳を過ぎてからですが、関東の方に移住される。そして六十歳過ぎる頃まで関東で過ごされます。

当時の関東地方は、農業後進地帯だったそうですが、とにかく関東に居られた。六十歳を過ぎてから京都に帰って来て、それからずっと京都に居られるわけですが、晩年は、著作をしたり、まあ関東あたりから教えを受けた人達が京都まで来たりということもあつた様ですが、大体六十歳を過ぎてからは、主に著述をしておられます。そして、九十歳で、お亡くなりになります。関東地方に、二十年程おられるんですが、その間、布教伝道活動をされたというんですけれども、さつきも申しました様にお寺を建てたのではないんです。色んな人の集まる機会などに話をされるといふ様な事は、あつたようですが、それでも、段々、門徒といいますが、信者が増えて参りました。今日の推定では関東地方に十万人を越えるグループが、あつたんだろうと云われております。そういう時に、六十歳を過ぎてから京都に帰って来られるんですが、何故かと云うことについては、色んな人が色んな推測をしております。そして、九十歳まで生きられるわけです。その頃ですね、日本の国が、どういう時代であつたかということ、ざっと見ますと、さつき申しました様に、一一七三年に生まれて、一二六二年に亡くなつておられますが、一一七四年、

承安四年、親鸞聖人がお生まれになった次の年ですが、この年に源義経が、奥州に下っておりま
す。それから、一一八一年に平清盛が死んでおります。続いて一一八五年に平家が、壇の浦で滅
亡致しました。そして、一一九九年、今度は、もう源頼朝が死んでおります。一二一九年には、
源実朝が死んでおります。一二六三年、これは親鸞聖人が亡くなられた次の年であります。北
条時頼が死んでおります。我が国の歴史で申しますとそういう時代ですね。そういう時代の中を
生きられた方であったということです。そして京都の町でお亡くなりになるわけです。ご存知の
様に、親鸞聖人という方は結婚をしておられる。このことについても、色々判らない点がありま
すが、大正十年に西本願寺の倉の中から、恵信尼文書という一群の文書、手紙ですが発見されま
した。恵信尼というのは、親鸞聖人の奥方の法名であります。そういうものが発見されたんで
すが、それによって色々な事が判ってきた、歴史的には色々な事が判って来たというところがあ
ります。この方が親鸞聖人の奥方です。ところが九十歳で、親鸞聖人が京都で亡くなられる、その
頃は、この恵信尼は越後の方に移っておられるんです。これも、色々想像がなされるんですが、
いつ頃、越後に行かれたかとはよく分りません。

大体、越後の出身の方であった様であります。子供の事とか孫のこととか、財産のこととか、
色々な事があって奥方は越後に帰られる。親鸞聖人の身の廻りの世話は、これも法名でしか判ら
ないんですが、法名 覚信という親鸞聖人の一番末の娘さんなんです。この方は、一度結婚し

て、ご主人に死なれて帰って来ておられたという人なんです、その方がお父様のお世話をして
おられた様であります。その頃のお手紙なんかが出て来たわけでありまして、色んな事が判るん
ですが、それは、今日の主題ではありませんから省きますが、そうして亡くなられた。そこでで
すね、亡くなってお墓が出来るわけであります。末の娘さんである覚信尼と、何人かのお弟子達
によって、東山にお墓が出来ました。後にそのお墓の傍に六角のお堂を建てて、そこに親鸞聖人
のお像を安置しました。このお墓を守る役目を後に留守職るしやくと、こう申しますが、そういう
ことを末のお嬢さんがなさったわけです。勿論、主に関東地方当りの沢山の門徒の方々が、色々
援助して下さったわけですが、このお堂が本願寺というものの、そもそも始まりなのであります。
ですから、始めから本願寺というお寺が出来たわけではないのであります、覚信尼が亡く
なってからは、その子供さんの覚慧という方が留守職を継ぎます。その後を覚如という方が継ぐ
わけでありませんが、親鸞聖人から申しますと、もう曾孫になるわけでありませんが、この覚如とい
う方が、本願寺の歴史としては、第三代目ということになります。親鸞聖人が第一代目です。ね。
その覚如という方が、本願寺というお寺を建てようという意図を持っておられた様であります。
覚如という方が留守職、つまりお墓の番になったのは、親鸞聖人が亡くなってから、五十年位
経ってからなんですけれども、この覚如という方が、大変努力をなさったんです、この方が、
三代伝持という事を唱えられました。三代目というのは、第一代目は親鸞聖人ですね、それから

第二代、これは聖人の孫になる人ですが、如信と言われる奥州におられた方で、時々京都に来ておられたようですが、この方を第二代目、そして、自分覚如が第三代目と。そういうことで本願寺というものを基礎付けると申しますか、寺として建てようという意図を持っておられたようでありませう。

ところが、いろんな事情がありまして、なかなか関東の方の、門徒の方々の了解が得られないというようなこともありまして、大変苦勞なさっておられますが、とにかく、その様にして初めは、聖人のお墓の脇に作られたひとつの御堂であったものが、だんだんと寺院化して参ります。つまり一般的な寺院としての本願寺というものがはつきりとして来るのは、覚如上人の頃からかと思われませう。覚如上人は、そういう意図を持っておられたと思われませう。

それから、覚如上人の子供さんが存覚という方なんです、この方は留守職を継いでおられませう。そして存覚の弟の從覚じゅうかくという方があって、その從覚という方の子供の善如という方が後を継がれる。この方が、本願寺の四代になるわけであります。それから善如上人が亡くなって、後は綽如上人しゃくじょうにんが本願寺の五代目になります。だんだん寺院としての格好を整えて来るのですけれども、この頃は参詣する人も少なく、さびさびとしておったと言われております。

その次の第六代目が巧如上人ぎょうじょうにんであります。この頃なんです、永和の時代ですが、堅田かたじの法住ほうじゆという人が本願寺にお詣りした、そうしたらですね、人跡絶えてさびさびとしていた。

誰も詣つて来る人もなくて、誠に寂しかったと書いております。

その次が存如上人ゾクニョであります。この頃から北陸の方に向かひまして、だんだんと教線拡張の努力をしておられるようであります。そしてその存如上人の次が、さつき申しました蓮如上人という第八代目の方ですが、蓮如上人の時代に至りまして、本願寺教団が爆発的に大きくなります。その下地みたいなものは、その一、二代前からあるようですが、あまり専門的なことは省きます。先にちよつと触れましたが、私共は蓮如上人を中興上人チュウキョウと申して敬っておるんですけども、それ迄のかなり長い間の努力が一挙に花開いたということがあるのかも知れません。

今日は蓮如上人の事を少し聞いて頂こうと思います。親鸞聖人の事は、皆さん大体ご存知だと思いますが、この蓮如上人の事はあまりよくご存知ないかもしれない。しかし、浄土真宗にご縁のある方々でしたら、蓮如上人は御文章によって現代に至る迄、我々門徒の者にとりましては大変親しい、又大きな御名前なのであります。蓮如上人という方は、継職なされましたのは四十三歳、若い時分は部屋住みで、大変苦勞なさっておられたようであります。いろんな言い伝えが残っております。勉強するにも油を買う金がなくて、黒木を割り、木を焚いて勉強したとか、結婚して子供が出来るんですけれども、召使い等を雇う事も出来なくて、自分で子供のおむつを洗濯したとかいうような事がいろいろ語られておりますが、四十三歳にして本願寺を継職されます。そして八十五歳で亡くなられるのですが、その間に本願寺というものが爆発的にと言つていい位

に勢力を伸ばすのであります。四十三歳で継職されまして、まず江州の方の教化に努められたような形跡がございます。それからあちこちにだんだんと門徒の数が増えて来るのでありますが、継職後八年、寛正六年（一四六五年）比叡山の僧徒らによりまして、本願寺が焼き打ちされます。そういう事がありまして、京都に居られなくなりまして、文永九年大谷本願寺創建以来百九十四年にして京都を去るわけでございます。つまり本願寺が京都に居れなくなったわけなんです。そしてあっちこっちと移転して、結局文明三年（一四七一年）北陸の方に、今の福井県、越前吉崎に行かれます。一四六七年が応仁元年でありまして、応仁の大乱になるわけですが、そういう事も関係あったのかも知れませんが、吉崎にお寺を建ててそこに移られるというのが文明三年であります。この文明三年から、文明七年迄、その間、実に精力的にいろんな活動をしておられます。その頃作られた御文章が沢山残っておりまして、今日でも尚それを我々が読むわけであります。実は私も、先般ちよっと吉崎へ行ってみました。その頃本願寺のあった跡という小高い所がありまして、実に要害と言いますか、交通の便利な水・陸の交通の要衝であります。そういう意味でも非常に優れた所なんです。蓮如上人がお寺を建てられた所は、みんなそういう所なんです。八十歳過ぎてから大阪にお寺を建てられるんですが、これはほぼ現在の大阪城のある辺りだと言われている。これは誰が考えてもわかりますように、天下の名城大阪城が出来る場所でありまして、戦略的な要地であります。まさか、戦争をしようと思ってお寺を造るわけではない

んですが、地理的ないろんな交通の便だとか、そういう事について非常に優れたお考えを持っておられたんだろうと思います。とにかく吉崎に本願寺が出来るわけでありまして。そして四、五年しか居られないんですけれども、多屋の数百余りという事を言われております。多屋というのはですね、本願寺を取り巻いて建物が沢山出来るんですが、それらが参拝される方の宿泊所、所謂宿坊であります。そういう多屋が百以上も出来たと言うんですから、沢山の人がお参りに来たわけです。

日本の宗教の歴史の上では、他にもある事なんです、そういう多屋が数年の間に百以上も出来たと言われております。そうなつてまいりますと、社会的ないろんな問題が起こつてまいります。それが文明七年でございます。そして蓮如上人は、大阪、河内、堺等に寺をこしらえておられます。そして又京都に帰つて来られます。文明十年ですが、それから山科に本願寺が出来るんです。文明十五年には、本願寺の諸建築が完成したとありまして、その後の文書等によりまして、実に壮大なものである。寺中広大無辺、莊嚴只如仏国、まるで極楽浄土の様であると言われる位、壮大なものであったようです。本願寺そのものが、政治的支配権を持っている広い町が出来ておる。土居という土手があつたり、堀があつたり、そういう物の跡は現在もまだ残つておりまして、都市計画の面から言いますと、山科の研究は大変興味あるものなんだそうです。

その後明応五年、蓮如上人、八十二歳であります、大阪にお寺を建てられた、それが後の石

山本願寺というんですけれども、大阪のお寺です。せしやうひがしなりこうりくたましやうない摂州東成の郡生玉の庄内、大阪という在所は、云々という御文章があるんですが、大阪という地名が、文書の上に出てくる一番古い例だそうでございます。その頃は、実に寂しい所であったそうであります。そして、八十五歳で亡くなったのでございます。今、ざっと申しましたが、蓮如上人という方は、あちこち、実に転々としておられるわけですね。しかも本願寺というものが、この時代に非常に大きな組織に変わって参ります。

蓮如上人について云えば、いろんなことがあるんですが、非常に子供さんが沢山あったということでも有名です。内室が五人あるんです。同時に五人あるんじゃないんですが、前の方が亡くなって、その後、その方が、また亡くなって次の人という風で、生涯五人の奥方がある。そして、その間に、十三男十四女、二十七人の子供がありました。そして子供をですね、重要な所に寺を作って、そこに居らしたり、大事な寺の養子にやったり縁組みをしたりして、要所に子供を配置するんです。そういう事も勢力拡張に役立ったと思えますね。

とにかく実にスケールが大きいというか、ケタ違いに偉い方であったと思います。ですから簡単に申しますと、浄土真宗というものは、始めたのは、親鸞聖人ですね。そして、親鸞聖人が亡くなってから、覚如上人という方が、寺というものにしようとなつたわけですね、それから、三代、四代・五代・六代と続いてまいりまして、八代目の蓮如上人という方に於いてですね、爆

発的に教線が拡張いたします。御文章その他いろいろ書かれた物が残っておりますので、そのお考えはよくわかるんでありますが、根本的には親鸞聖人の教えが今の時代では歪められておると、門徒であると言っておつても、親鸞聖人の教えに背いているところが多いと。これを正しくしなければいけないというのが根本であります。しかし、その為にはどういふ事をしなければならぬかという、いろいろな工夫努力をしておりますのであります。

御文章等もその大きな一例であります。人が集まっておるところには、自分が行つて話をしたいけれども、なかなか何処へでも行くことは出来ないから、その代りに手紙を書く。これを読んでくれとか、又本願寺に人がお詣りして来た時でも、ゆつくり話が出来るとは限りませんから、留守の間に来る人もありますから、本堂にそういう物を置いておいてですね、読んでもらつていふような事もしております。特定の個人に向けて書かれた物もありますし、一般的な物もあります。沢山書いておられます。いろいろ内容的にも大変大事な物ばかりですが、ご自分でもこれは自分が書いた物なんですが、大変結構な物だと、年とつて亡くなされる前に、子供さん達に自分がこしらえた御文章を読ませて、これは自分が書いた物であるけれども、しかしながら、実に結構な有難い物だと言つて喜ばれたと、そういう逸話も残っております。

それから、今私共は、帰命無量寿如来という親鸞聖人の正信偈をよく勤行でよむのですけれども、正信偈を唱え和讃を唱えるという形式を定められたのは、蓮如上人であります。しかも、そ

れを印刷物として出版されるわけです。京都にずうっとおられたわけじゃないですが、そういう事でも非常に先駆的な仕事をなさっておられるんです。ちょっと思いついたんですが、蓮如上人が亡くなられたのが一四九九年、だからことしから九年たつと五百年になるんですけども、リターが、ヴィッテンブルグで九十五ヶ条を張り出したのが一五一七年です。最初のドイツ語訳をやり始めるのが、一五二一年だと言われております。そうしますと、このルターよりも大分早い時代という事になります。

それからもう少し蓮如上人の事を申し上げますと、浄土真宗が始まるのは親鸞聖人の教えに始まるわけですが、それを本願寺というお寺にするのが覚如上人という本願寺の歴史では三代目の方です。しかし、大きな教団に発展させたのが、八代目の蓮如上人という方の時代だという事になります。勿論いう迄もない事ですが、この頃は本願寺はひとつでございます。現在は京都の町には本願寺という寺はふたつあります。京都の人は西にある方を西本願寺、東にある方を東本願寺と、お西さん、お東さんと呼ぶ。今私が申し上げております頃は、本願寺という寺は分裂してないのであります。

そういうふうには、非常に教勢拡張をなさったご一代であつたんですが、蓮如上人の化風と言いますか、特徴、どんな事をなさったかということについて更に申しますと、ひとつは講というものを奨励をしておられる。何々講、つまりグループ作りであります。この頃日本の農村のいろい

ろな社会組織が、非常に變つて来る時代だそうですね、講といふものを、奨励されまして、そしてところどころにいろんな講があるんですね、沢山のグループが出来まして、それによつて、そこで布教伝導活動が行われる。それも主として話し合いです、その話し合ひの時にものを言え、ものを言え、ものを言わないのは悪いぞと言つておられます。座談会では、黙つていてはいけない、もし自分が間違つておるならば、しゃべれば聞いた人が注意もしてくれるといふ事もありうるのだから、ものを言えとおっしゃる。実に今取り上げてみても、示唆的な大事なやり方だと思つてますが、そういう講といふものが沢山出来ます。これは又一方では本願寺にお金を運ぶ組織にもなるわけです。それだけではなくて、農村社会が非常な變動期であつて、そういうグループがいつもいつも集まつて話し合ひをしておりますといふと、それらが社会的な力を持つ、そういう事で一向一揆といふ現象にも深く関係があります。北陸地方では一揆の勢力が百年に亘つて支配した所もあるといふ位、非常に大きな社会的な勢力にもなつておつたわけです。それでそういうものを基礎にしておりますから、本願寺教団が非常に強いわけであります。それ迄の古い時代のお寺は、原則的には莊園を持つておりまして、それは朝廷なり領主なりが寄付してくれるわけですが、莊園があつて、そこからの年貢によつて、寺の経済が維持されるわけです。併し講等を基盤にしますと、そういう莊園ではなしに、いわば人を基盤にするわけです。こんどの戦争後に農地改革で、お寺とか、お宮とかの持つてゐる田畑を解放させられたのですが、

そういう田畑に依存して、それから上つて来るところの小作料に依存しておつた、お寺、お宮はあの時に大打撃を受けました。ところが、真宗の寺院は昔から伝統的にそういうものに寄りかかなくて、信者に寄りかかつておるわけでありますから、人間に寄りかかっていると云いますか、あの田畑が取り上げられても、余り打撃をうけないところがありまして、蓮如上人以来の伝統だろうと思うんですが、大きく言つて、そういう傾向があります。

それから蓮如上人についてよく言われるのは、非常に庶民的な態度をとつたということです。「我は門徒にもたれたり」と言われて自分が偉いのではないとよく言つておられます。

本願寺もだんだん一般的なお寺のような形になってまいりますと、古い形式というものの真似をして、例えば、お座敷なんかでも、お坊さんの座る所はちよつと高い所に座るといふ事をやっておつたんでしようが、そういう事はいけないと、皆同じ所で話をするといふ事が非常に大事なんだといふ事を、しばしば強調しておられます。

それから門徒を大事にしなればいけないと、だから本願寺なんかでも、だんだん組織が大きくなってまいりますと、蓮如上人にちよつとお会いしたいと言つたつて、なかなか会えない。そういう事を非常に厳しく注意しておられます。意味もないのに、そこで暫くお待ち下さいと言つて待たせるといふような事は絶対にいけない、門徒に会うといふ事は非常に大事なんだから少々何かあつても、すぐに私に言つて来なさいと、いつも言われております。

それから、門徒の方が遙々とやって来た時には、お酒等を出して、搞わなければいけない。それも夏の暑い時にはお酒を冷やして出し、冬の寒い時には少し熱燗の方がいいとか、そういうような事も、実に細々と指図をしておられます。だから若い時から非常に苦労なされた方であると思います。自分が八十五歳で亡くなるのですが、その頃に子供とか、孫だとか沢山の人が、いろいろお見舞に来たり看病に来たりする。その時に、私の足を見てご覧と言われたことがありますが、若い時にわらじばきで一所懸命あちこち歩き回った。自分の勉強の為でもあるんですが、ご門徒の方々に接触する為という事もあるんです。そのわらじの跡が足にくっきりと食い込んだのが今でも残っている。これを見てくれと言われたとか、そういう類の逸話が実に沢山残っています。だから非常に人間的な魅力があった方に違いないんですが、教学的にも親鸞聖人が亡くなってから年月が経って、いろいろなことで歪みかけていたものを、ちゃんとした本筋に戻すという、そういう事には非常に努力をしておられます。

若い部屋住みの頃、やっぱり勉強も非常によくされたようであります。後、本願寺住職になれるのが、四十三歳で四十歳過ぎてからです。そして、あちこちにお寺を作るし、自分の子供さんをあちこちに配置し、二十七名ですから若くて亡くなった人もありますけれども、私共、今考えてみますと、本願寺は実に蓮如上人のおかげによって大きくなったのであると思います。

蓮如上人の事を申し上げるときりがありませんが、先程申しましたように今から八年しますと

五百回忌、何回忌は満年にひとつかえして数えますから、四九九年で五百回忌を勤めるわけです。五百回忌が平成十年にまいます。何をするかを今から考えねばならないのですが、私共としては蓮如上人の時代、それから、これから申し上げますが、顕如上人の時代の本願寺について、単なる歴史的な知識というような事ではなくて、現代から将来に向ってのひとつの大きな教訓として考えなければならぬと思っております。

蓮如上人が亡くなられる時は京都に帰って、山科で亡くなられたのでありますが、大阪が気に入っておられたようです。亡くなられる時は、京都に帰られ山科で亡くなっておられます。

次の方が実如上人という方でありますが、蓮如上人の時代から、次の実如上人、証如上人、本願寺で申しますと九代目、十代目という、そういう頃にどんどん本願寺の勢力が伸びております。私は、九州大分県なんです、大分県辺りはもうちょっと時代が下るんですけども、一番古い所では蓮如上人の教えを受けた人が大分県に来て寺をこしらえたという古い例はありますが、私共の寺はもう少し下り、徳川時代になってからです。教団の勢力が伸びたということは具体的に言えば、全国にお寺の数が増えて、そして、門徒の数が増えて行くという、そういう事ですね。お寺があってもなくてもいいじゃないか。それは本質的な問題でないというご意見もありますけれど、しかし、教団組織としては、やっぱり活動の拠点としての寺というものを考えざるを得ないわけです。ちょっと話が横にそれますが、現在私共の大きな悩みは、日本の国で人間の沢山おる

所にお寺が少なく、人間の余りいない所にお寺がある、という、そういう問題であります。九州でも、私、大分県の海岸なんですけれども、海岸線の方は、ともかく山の方へ入って参りますと、非常に、過疎化が目立ちます。最近では、山陰地方が有名であって、いつかテレビで紹介されましたがお寺が無くなっていくというよりも、人がいなくなっていく、段々住んでいる人がなくなっていて、お寺だけが残っているという事です。そして、一方、首都圏、東京なんかへ参りますと、どんどん人が増えているのにお寺が少ない。お寺なんかあっても無くてもいいから、無いんだと言われることもあります。私共の九州の方から東京の方へ移住した人達がやはりお寺を紹介してくれというんですね。葬式の時、困るだけじゃないんですね、近くには寺がない訳です。関東は以前から真宗の寺の少ない所なんです。そうしますと人口の少ない所には、寺の数が少なくて、そして、殆んど人間のいない様な所には寺が残っている。それは簡単じゃないか。その寺をこちらへ移転すればそれで解決じゃないか、と。そうなかなか算数計算の様にまいたらない。そういう事を今、我々は非常に努力して、都市開教でありますとか、過疎化対策とか申しまして努力しておりますが、はなはだ力およびませんが、そういう風にして、一般的に言えばお寺の数がどんどん増えていくということが、やっぱり教線拡張というか、教団の勢力が広がっていくと、こういう事になる訳であります。で、それが蓮如上人、実如上人、証如上人という時代です。ところが、そういう事になってまいりますと、やっぱり戦国の時代ですからいろんな事に巻き込ま

れたという様なこともありまして、山科、京都の本願寺が又焼かれるという事が起こります。そして大阪の本願寺、蓮如上人がこしらえた大阪のお寺に、本願寺が移る。天文二年（一五三三年）本願寺が大阪へ移ります。そして先に山科の所でも申し上げました様に、大阪の本願寺を中心にした、いわゆる寺内町といいますが、そういうものが非常に発展致しまして、一種の領主の様な、そういう様な本願寺になってくる訳です。で、そうなりますと色々な問題が起って来る訳でございます。十一代目の顕如上人という方が、継職されるのが天文二十三年、一五五四年ですから、織田信長の天下がやって来るわけであります。そして天正八年に大阪を退去するんですが、約十一年間本願寺は織田信長と戦争を致します。石山本願寺と申しておりましたので石山合戦というんですけれども、頼山陽の「抜き難し南無六字の城」という詩がありますね。織田信長が一生懸命攻めたけれどもなかなか簡単に本願寺を落とすことが出来なかつたということです。結局は朝廷の仲裁で、和睦し大阪を退去致します。これが天正八年です。そして行きました所が、紀州鷺の森、和歌山に本願寺が移転致します。和歌山はいわゆる雑賀衆ざいかしゆうですな、我が国の鉄砲の歴史に有名な雑賀衆です。これは戦争のとき非常に大きな戦力であった、鉄砲は当時の先端的な武器ですからね、その雑賀衆を頼りにして和歌山へ参ります。これが天正八年ですね。そして本能寺の変で織田信長が殺されるのが天正十年ですね。だから、もう暫く頑張っていれば織田信長が殺されたということになります。これは歴史の「もしも」ですけども、とにかく天正八年に本

願寺は和歌山に移ります。そして織田信長は殺されて、後は豊臣秀吉が天下を取るわけですが、豊臣秀吉は、本願寺に接近してきます。天正十一年に和泉の貝塚、十三年に大阪の天満という様に転々と移っておるんです。これは豊臣秀吉の意志だったのかも知れませんが。そして天正十九年に京都へ帰ってくるのであります。これは豊臣秀吉の京都市の都市計画の一部として考えられたものの様であります。その時に今の本願寺、いわゆる西本願寺のある所ですな、あその土地を貰うんです。必ずしもここに来なさいと言ったんじゃない様ですが、下鳥羽へんから上でどこか適当な所という指示で、それで顕如上人が京都へ来られてまあこの辺がいいでしょうということとで移ったんだそうですが、それが来年で丁度四〇〇年ということなんです。そういうご苦労のせいでありましょうか、顕如上人は次の年に病気で亡くなります、五十歳です。本願寺の歴史としては、戦国時代のいわゆる群雄相争う時代にあつてですね、幾多の困難に遭遇しながら、ここに再び京都に帰って来たということになるわけです。ですから、本願寺は京都の土地を離れてあちらこちらに移転しておるわけですが、そのことの意味をどう考えたらよいかというのが、一番最初に申し上げたことなのであります。京都の町は応仁の大乱で、京都に居たくてもおれなかつたという情勢もあつたかも知れませんが、しかしとにかくまた京都に帰って参りました。それ以来四〇〇年、ということ。そのまま話をとばしますと、明治の時代に東京へ移転しようという動きが本願寺の内部にあつた。ところが結局反対が多くてやっぱり京都を離れられなかつ

たんですが、ま、しかし千年の王城の地にあったということが本願寺の発展のために、やっぱり大きな意味があったのではないか、と思っております。それでは京都の町に対して本願寺がどれ程のことが出来たのかということになりますと、これはまあちよつと何とも判りませんが、京都のおかげを被っておるということは間違いないことであります。そして織田信長と和睦が出来まして大阪本願寺を明け渡すときに、本願寺の内部が和睦派と徹底抗戦派と二派に分かれました。顕如上人の長男の教如といわれる方は抗戦派の方で、織田信長は信用できないという方でした。顕如上人が亡くなられて、その教如という方が一時後を継ぐんですけれども豊臣秀吉やなんかの色々な意見があつて、この方は止めさせられるんです。そしてその弟の准如じゆんじよという方に後を譲る。ですから私共の方では顕如上人の長男の教如という方を歴代の中には数えておりません。で、この教如という方を徳川家康が応援するのであります。そして出来ましたのが現在の東本願寺ですね。ですから本願寺の内部にそういう分裂の要素があつたということですが、見方に依れば徳川が政策としてそれを利用したと、こういうことも言えるかもしれません。結局本願寺というのは社会的にも大きな勢力ですから、それは二つに分けた方がやり易いということだったのかも知れません。それはともかくそれ以来、京都の町には本願寺が二つあることになりました現在に及んでおると、こういうことであります。

それでは三時半になりましたので、これで終わります。あまり面白い話ができなくて申し訳なか

ったんですけれども、一番最初に申しました様に、本願寺というものを京都の方々にいくらかでも知っていただくことができれば、これは私の勤めの一つでもあり、報謝の一端でもあろうかと思つて、お話しを申し上げました。どうも失礼致しました。

ありがとうございます。

——終り——

(教尊寺住職・前浄土真宗本願寺派総長)